

“世界寺子屋運動”名古屋実行委員会ではアフガニスタン、カンボジア、ネパール、ミャンマーの4か国に支援を行っております。現地のレポートを日本ユネスコ協会連盟よりいただきましたので、ご紹介いたします！

★アフガニスタン★

アフガニスタンは、1970年代のソ連軍の侵攻やその後の内戦、タリバン政権による抑圧、アメリカ軍による空爆などの度重なる国難に見舞われ、学校などの教育システムが破壊されてきました。その結果、世界で最も識字率の低い国の一つに位置付けられています。このような状況を受けて世界寺子屋運動では、2002年より、教育復興の礎となる成人識字教育を中心に、生活のための職業訓練なども合わせて実施してきました。

しかし2021年8月の政変により、女性の教育や社会進出に消極的な勢力が政権を握ったことで、教育に関する状況は大きく後退しています。2025年度末現在、女子は小学校までの教育しか受けることができず、女性の就労や社会参加の機会は大幅に制限されています。

～活動報告～

今年度も引き続き政権の方針により国際NGOは教育分野への関与が制限されているため識字教育を実施することはできませんでしたが、職業訓練を所管している労働・社会問題省との連携のもと、職業技術訓練プログラムを実施しました。

2025年度はカブール市内2か所にて、裁縫、配電、大型・小型家電修理の就職に有利と考えられる職業訓練コースを2学期(2025年7月～2026年7月)開講し、1学期(2025年7月～2026年2月)は合計262名が受講しました。また、通常コースに加え消防訓練も行いました。

2026年2月の修了試験では、受講者の90%以上となる243名が合格しました。受講者に対しては、ミシンなど習得した技術の活用に必要なツールを提供すると共に、事業の効果を確認するため、コース修了後の就業や収入状況等についてフォローアップを行います。



配線コースの様子



携帯電話修理コースの様子



裁縫コースの様子



消火訓練の様子

受講者の声：アフマド・ムラードさん（配線・ソーラーパネル設置コース）



「前政権下では省庁でコンピュータオペレーター兼ドライバーとして働いていましたが、現政権になってから職を失いました。失業による苦労は大きなものでした。

以前日本ユネスコ協会連盟のコースを修了した友人から次のコースが始まると聞き、すぐに入学試験を受けました。そして幸運にも電気修理およびソーラーパネル設置コースに合格しました。

当初は座学中心だと思っていましたが、実際には座学 2 時間、実技 2 時間の構成で、学んだことをすぐに実践できる点がとても面白いです。近所ではこの技術訓練コースが広く知られており、次回のプログラムを心待ちにしている人も多くいます。」

受講者の声：ソルーシュさん（携帯電話修理コース）



「大学で土木工学を学んでいましたが、経済的な理由で退学せざるを得ませんでした。仕事を探す中で民間の短期職業訓練も検討しましたが、授業料が払えませんでした。

その後、このセンターを修了した友人から、日本ユネスコ協会連盟の無料コースについて聞き、とても嬉しく思いました。入学試験に合格し、現在受講しています。将来は携帯電話修理店を開業し、家族を経済的に支えたいと考えています。

私と同じように高い教育を受けながらも失業している若者は数多くいます。コースで学習した技能は、雇用市場で非常に需要があります。この機会によって、私たちは収入を得ることができます。アフガニスタンが困難な状況にある中、皆様の支援に心から感謝しています。」

★カンボジア★

1970 年代から 90 年代にかけて内戦状態にあったカンボジアでは、教育が完全に途絶え、現在も長い復興途上にあります。成人識字率(15 歳以上)は 72% (2026 年)、初等教育(小学校)の就学率は 96%(2024 年)ですが、都市部と農村部間や男女間で格差が存在します。読み書き計算などの基礎的な学習能力は、新しい知識や技術を学ぶ土台であり、世代を問わず欠かすことができません。加えて、貧困のため義務教育段階で中途退学する子どもの多さが長年の課題です。UNESCO によると、小学校修了率は 81.7%、中学校修了率は 59%に留まります。さらに、学びの質の問題「学習の貧困」が深刻となっています。小学校最終学年で最低限の読解力があるのは全体の 19%、算数能力では 40%となっており、子どもの学びの質の面に対する貢献が求められます。

～活動報告～

2025 年度はカンボジア政府と締結した 3 か年事業計画の初年度でした。教育活動では、成人識字クラス、小・中学校クラス、幼稚園クラスなどを通じて計 869 人に学びの機会を届けることができました。

また、養牛や収入向上活動に 190 世帯が新たに参加し、必要とする知識やスキルを学びました。その他、図書室での活動や、各クラス教員と寺子屋運営を担う運営委員向けの研修も継続して実施しています。

24 軒目の寺子屋完成

2026 年 2 月、シェムリアップ州アンコール・チュム郡ノーコー・ピアコミュニティに新しい寺子屋ができました。ノーコー・ピアコミュニティでは住民の約 45%が国家貧困ライン以下で生活しています。また、労働人口の約 88%が農業に従事しており、干ばつ・洪水等の影響を直接受けており、収入が不安定です。今後、寺子屋で小学校クラス、識字クラス、職業訓練などを通して、地域の貧困層・教育を受けられない人に学習の機会を届けます。



ノーコー・ピア寺子屋外観



小学校クラス（EQ）の授業の様子



給食の様子



識字クラスの様子



図書室での様子

2026 年度は寺子屋 1 軒の建設を予定しているほか、引き続き成人識字クラス、小・中学校クラス、幼稚園クラスなどの教育活動を行うと共に、収入向上活動や、寺子屋の自立的な運営を目的とした運営委員の能力強化に努めます。

学習者のメッセージ

シエン・シエブ・イさん（ロハル寺子屋 小学校クラス）



「貧困のために学校を中退し、家族の責任を担わなければならない状況に置かれたが、学びたいという夢を決して諦めたことはありませんでした。寺子屋を通じてその夢が叶い、私は小学校修了認定クラスに通うことができました。学ぶことは私に新たな機会を与えてくれただけでなく、学びを支えてくれる先生、そして教育がより良い未来を築く力になるのだと希望を持てるようになりました。」

サオ・スーさん（リエンダイ寺子屋 中学校クラス）



「両親を亡くした後、困難な家庭環境に直面し私にとって教育への道は不確かなものになりました。しかし、中学校プログラムを通じて再び学校へ戻る勇気を持つことができ、世代を超えて家族を苦しめてきた貧困の連鎖を断ち切りたいと思うようになりました。今では自信と強い決意に満ちており、学びを続け、より良い人生にしていきたいと思っています。」

★ネパール★

ネパールは北部にヒマラヤ山脈を擁し、地理的制約によってインフラ整備や輸送に多くの課題を抱えています。その結果、地域間の経済格差が大きく、教育へのアクセスにも影響が及んでいます。近年は観光業や海外送金により経済成長が進み、小学校の就学率は向上してきましたが、ルンビニなどの農村地域ではいまだに中途退学や未就学児童の問題が残っており、とりわけ女性の非識字率の高さが課題となっています。

～活動報告～

2025 年度は、9 軒の寺子屋において 180 人の子どもたちが幼稚園クラスに参加し、ネパール語や英語の基礎学習に加え、挨拶や手洗い、歯磨きといった基本的な生活習慣についても学びました。これにより、就学前の学習機会の提供にとどまらず、日常生活の改善につながる公衆衛生などの知識の普及が進みました。

成人識字クラスでは、単なる読み書きの習得にとどまらず、参加者が自らの生活課題について意見を交わす機会が生まれました。また、地域の簡易保健所を訪問することで、無料で受けられる医療サービスへの理解が深まり、生活に直結する実践的な知識の習得が進みました。こうした学びは、参加者の日常生活の質の向上と自立意識の醸成に寄与しています。

さらに、寺子屋の運営を担う委員や地方自治体の関係者を対象に研修を実施し、寺子屋の法的位置づけや役割分担について理解を深める機会を提供しました。その結果、合計 229 人が参加し、地域主体で教育活動を継続していくための体制強化が図られました。これは単年度の成果にとどまらず、今後の持続的な運営基盤の構築につながる重要な成果です。

また、西部ジャジャールコット郡では新たにパジャル寺子屋が完成し、成人識字クラスに加えて地震に備える防災ワークショップが実施されるなど、教育と生活安全の両面から地域を支える拠点としての役割が始まりました。これにより、寺子屋が単なる学習の場を越え、地域社会に根ざした総合的な活動拠点として機能し始めています。

2026 年度は、ルンビニの新たな地方自治体を対象として、これまでの成果を発展させる取り組みが予定されています。具体的には、成人女性の識字クラスの拡充に加え、ICT や携帯電話を活用したフォローアップ学習の導入により、学習の継続性を高めることが目指されています。また、職業訓練や就業支援、未就学児童とくに女子への奨学金支援を通じて、教育と経済的自立の両面から支援を強化します。

さらに、寺子屋運営者への研修や地方自治体との連携強化を進めることで、地域主導による教育体制の確立を図るとともに、女子教育の重要性や環境問題に関する啓発活動を展開していく予定です。

学習者からのコメント

プラバワティ・バダイさんとプレムちゃん（幼児教育クラス）



「ナマステ！私の名前はプラバワティ・バダイです。私の5歳の息子プレムは、アビラワ寺子屋の幼児教育（ECD）クラスに通っています。通い始める前、プレムはとても内気で、他の子どもたちと遊ぶのが苦手でした。

最初の頃は、新しいことに戸惑い泣いてしまうこともありましたが、しかし今では大きく変わり、文字を認識できるようになり、歌を歌ったり、絵を描くことも大好きになりました。毎日学校に行くのをとても楽しみにしていて、家に帰ると自分が学んだことを私に教えようとするほどです。

保護者向けのクラスを通じて、私自身の役割の重要性も学びました。今では、一緒に遊んだり、物語を話したり、会話をしたりして、家庭でも息子の学びを支えています。息子の成長を見ることができてとても嬉しく、次は近くの公立学校に入学させる予定です。」

イシュウォルワティ・サハニさん（家族での識字プログラム）



「私は39歳で、9人家族と一緒に暮らしています。私たちは農業や日雇い労働で生計を立てています。学校に通ったことがなかったため、生活はとても大変でした。病院や役所で

署名の代わりに親指の押印をしなければならないときは、いつも悲しい気持ちになっていました。

しかし、スカラウリ寺子屋で行われた4か月間の家族での識字プログラムに参加してから、すべてが変わりました。今では、自分の名前や住所を書けるようになり、署名もできるようになりました。また、30まで数えられるようにもなりました。このプログラムは、娘のマニシャとのつながりも深めてくれました。

放課後にスマートフォンばかり見ていた娘と、今では夕食後に一緒に座り、衛生、ダウリー制度（結婚時に新婦側の家族が新郎側の家族に送る金品や財産）、環境といった大切な話題について話すようになりました。自分たちの伝統について子どもたちに教える力を得られたと感じています。」

★ミャンマー★

ミャンマーでは、長期にわたる軍政時代の経済的停滞に加え、対立する複数の少数民族との和解プロセスの停滞から、政情不安に見舞われてきました。UNESCOによると、成人識字率は推定 76%であり、小学校最終学年就学率は 95%に達する一方、中学校では 65%に留まり、子どもや若者の中途退学率の高さも主な課題のひとつです。2020 年代に入ってから、コロナ禍の影響に加え、2021 年 2 月の軍事クーデター以降は現地での活動が難しい状況が続いています。

～活動報告～

こうした状況を踏まえ、2025 年度はミャンマー国内での直接的な活動が制限される中でも、支援を途切れさせないための取り組みとして、バングラデシュに避難しているロヒンギャ難民の若者を対象とした教育支援を継続しました。2017 年以降の軍事介入により 70 万人以上が難民生活を送る中で、学びの機会を失いがちな若者、とりわけ女性に対して、新たな形で教育機会を提供することを目指しました。

本年度の大きな成果は、従来の紙教材による学習形態を見直し、識字教育および職業訓練の教材をデジタル化した点にあります。タブレット端末を活用した教材の開発により、外出や移動に制約のある難民キャンプの環境下でも、学習へのアクセスが可能となりました。特に女性にとっては、集団での通学が難しい状況においても、グループ単位で安全に学習を継続できる環境が整えられた意義は大きく、教育機会の格差是正に向けた重要な一歩となっています。

さらに、これらのデジタル教材には音声ガイダンスが組み込まれており、教員が不足している環境でも、学習者が自律的に基礎的なビルマ語や英語を習得できる設計となっています。これにより、従来は指導者の確保が課題となっていた難民キャンプにおいても、継続的な学習の仕組みが実現しつつあります。このように、教育の提供方法そのものを柔軟に転換することで、困難な状況下でも学びを止めない仕組みを構築できた点は、本年度の最も重要な成果といえます。

今後は、ミャンマー国内での活動再開の可能性について引き続き情報収集を行いながら、状況に応じた支援の再構築を検討していきます。同時に、バングラデシュにおいては、現在開発中のデジタル教材を活用した女性向け識字クラスの実施が計画されており、これまでに構築した学習基盤をさらに発展させていく方針です。これにより、厳しい環境下においても持続可能な学習機会を確保し、教育を通じた自立支援を着実に前進させていくことが期待されます。